

---

# 俺の妹は世界で一番可愛い

白野ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の妹は世界で一番可愛い

### 【Nコード】

N5985X

### 【作者名】

白野ハル

### 【あらすじ】

けいおん！の二次作品です。

似たような内容があるかもしれませんが読んでいただければ嬉しい限りです。

初投稿なので駄文かもしれませんがそれでも大丈夫の方は読んでください。

俺が妹に恋をするかもしれない(前書き)

ネタですが、どうぞ。

## 俺が妹に恋をするかもしれない

俺が今から語る事は全て妹の事である。

この世に唯一人しかいない俺の妹は兄の俺が言うのもあれだが・・・いや、兄である俺が言わなければ意味がないであろう。

俺の妹は「世界で一番可愛い」のだ。

その妹を持つ兄の俺は世界で一番の幸せものであろう。

そんな俺を赤の他人から見ればかなりシスコンが入った危ない奴と思われるかも知れないが、それはそれで結構な話である。

俺の事をシスコンと呼びたい奴には呼ばせておけばいいのだ（実際俺の友達からはそう呼ばれているのだが）、俺の妹に対する兄弟愛はそんな事では揺るぐことはない。

最近では兄の俺を慕い同じ高校に入学してきのだ。高校に入った妹は益々美しさに磨きが懸かり、俺の目には妹から極光がかかる始末でさえある。

だが近頃妹は俺に対して少し態度が冷たい・・・少し遅めの反抗期みたいなものだろうか？

いやいや、俺の考えすぎに違いない。

そうだと俺は信じてるさ。

そんな妹が最近ちょっと様子がおかしい様な気がする。何か必死に考えてる気がした。それは妹を何年も見続けていた家族にしか分からない勘だった。

となれば兄が妹の力になってあげるのは当然の事である。

俺は妹の悩みを聞くため自分の部屋から移動する。

未来の俺はこう思うだろう、「あの時にその行動を取らなければ違う未来もあったのであろう」

いや、そもそも俺がそんな事できる訳がない、それにドラマや小説などでよくある話だが「未来は既に決まっている」という言葉が。

正直決まったレールの上をただ走りつづけるなんて事は真っ平御免である。

俺は自分の道は自分で走り続けていきたいと思ってるからね。

だけど俺がとった行動は既に決まっている未来に続いてるかもしれないが、それはそれで構わない。

そう俺「中野 柳」の妹「中野 梓」が幸せであるなら、どんな未来だって構わない。

「中野梓」

11月11日生まれ

身長150cm 体重46kg

血液型はAB型である。

現在は桜が丘高校に通う女子高生で、趣味は両親のジャズバンドをしていた影響で確か小学4年生ぐらいの時からギターを弾き始めていた。

兄の俺とは違い両親から音楽の才能を頂き、いや兄の俺とは違い音楽に対する気持ちが大きいにあっただであろっ。

因みに俺も昔はギターをやろっとしたが親父に「男ならスポーツ！いや、野球だ！」と言われ汗かく競技に変更になったのだ。

性格は真面目でしっかりしているし、勉強、運動は中の上といった所でまさに文武平等である。スタイルは他の娘よりやや見劣りする所があるかもしれないが、兄の俺にとってみればむしろ加点評価で、その全てが俺の妹をより美しくする為の布石ではないのかと思ってしまう。

まあ、要するに一言で言うのであれば俺の妹は世界で一番可愛いのだ。

「傾国美女」と言う言葉を知っているだろうか。今俺は妹を見てそう思った。

学校から帰って来たばかりで制服のままソファアの上に座っている我が妹梓。

正に妹の為に用意された言葉ではないであろうか、一瞬俺は真剣に考えてしまった。

と、その時に

「なにしてるのお兄ちゃん？」

考え込んでいる俺に梓は声をかけていた。

「いや、なんでもない・・・それより梓今帰ってきたのか？随分遅かったみたいだけど・・・」

「うん・・・ちょっと部活見学に行ってたから」

と一つ答えるのにも気品を感じる。

それにしても部活か・・・梓の事だから音楽関係かな？

俺がそれとなく聞いてみると、

「うん、ちょっと今まだ考えているから決まったら教えるね」と言い二階の自室に戻っていった。

そういえばウチの高校って音楽関係の部活はどの位あったけ？ 確か

ジャズ、吹奏楽・・・あ、後は軽音の三つだった筈だ。

なるほど・・・梓は今どっちにするか悩んでるんだな。ジャズか軽音に・・・

ここで兄として俺が取るべき方法は一つしかないであろう。

そう妹の笑顔を見れば良いただそれだけだった。



俺が妹に恋をするかもしれない（後書き）

感想等ありましたらお願いします。

俺が妹に恋をするかもしれない？

その日の晩、家族四人でテーブルを挟んで食事をしている時だった、突然親父が、

「梓、お前高校はどうだ？」

と梓に聞いた。

「どうって何が？」

「何が」じゃなくて高校が始まって一週間経って馴れてきたとかあるだろそういう話だよ」

と親父は梓に説明しているが・・・

（我が親父ながらもの凄いバカっぽい話し方だな・・・いつもの事だが）

「そうですね、私も聞きたいです梓」

母さんも梓に答えを求めている。

「うーん、大分馴れてきたよ、中学の友達も何人かいるしクラスの子とも仲良くなれたし」

まあ俺達を通う高校はいたって普通の高校だし、変わっていると言えは少し前まで女子高だったぐらいであろう。

「クラスに気になる奴とかはいないのか？」

親父は笑いながら梓に質問する。

（ナイス質問だ、親父！）

梓は少し困った顔をし、

「えー、わかんないよそんな事」

と答えるだけだった。

「なんだなんだ、最近のガキは俺の可愛い娘に積極的にアピールする奴はいねーのか、まあもしも良い奴がいたら連れてこい、俺が判断してやるぜ！」

「えー・・・」

返答に困る梓を見ながら親父は喋り続ける。

「まあ、当然娘はやらんがな  
と決め台詞を吐く。

「ふつ、親父一つ忘れてるぜ」

「なんだバカ息子よ」

俺は口の中のご飯を飲み込みこつ告げた。

「まずは親父の前に兄である俺が妹に相応しいかどうか判断するぜ  
！！」

「・・・何言ってるのお兄ちゃん？」

隣で梓は俺の発言に呆れているが、

「柳よ、俺は今お前を生んで一番良かったと思ってるぞ」

と親父は笑みを浮かべながら答えてくれた。

「アンタからは生まれてきてはいないが・・・サンキュー親父」

俺がそう言った後で笑いあう親父と俺がいた。そんな二人を見て呆れた顔をする梓と同じく笑顔でいる母さんがいた。

少々変わっているがこれが内の家族である。

親父の名前は「中野一樹」

母さんの名前は「中野遥香」だ。

両親は高校の頃に俺を生んでいて二人とも年齢はかなり若い。

その頃の親父たちは物凄く大変だったと聞いたことがあるが、深くは知らない。

誰だってそうだろう、親の昔のなれ初めやその他諸々などを興味があつて聞くななんて事はないと思う、子供であれば・・・

先程の話に戻るがもしも梓が本当に好きになつた男ができて家にもしも、もしも連れてきたら俺はどうするのだろうか？

大好きな妹の事を考えれば黙って見守るのが一番だろう、だけど俺にそんな事ができるのか？

いや、きっとできないだろう。

妹が嫌がるだろうが俺はその男をぶん殴ってしまうかもしれない。

勝手な兄貴だとは思うが俺はまだそこまで人間ができていないのだ。

翌日の朝。

俺はかなり早く起きていた。

正直早く起きるかどうかももの凄い悩んでいた。なぜその様なことに苦悩していたかと言うと・・・

朝は梓が俺を起こしに来るからだ。

寝坊する兄を起こす妹、そう俺は梓から起こしてもらつことに深く幸せを感じているからだ。

だから妹が起こしに来る前に起きててもわざと寝たフリだつてする。しかし梓は俺を起こすのは嫌なんじゃないかと最近思う節が見当たるところがあるが俺は気づかないフリをする。

朝食を早めにとっていると梓が二階の階段から降りてきた。

「おはよう・・・あれお兄ちゃん今日は早いね」

「まあ、たまにはね」

俺のいつもと違う行動に少し驚く梓。

既に制服に着替えていて学校にいく準備は出来上がってる状態だった。

「それじゃあ、お母さん私行くね」

梓はそう言いながら玄関に向かう。

「母さん俺も行くから」

俺も梓の後を追うように玄関に向かったが梓は外にすでに出ていたので駆け足で後を追う。

「梓！」

「お兄ちゃん？どうしたの？」

「たまには妹と学校に行こうかなと思ってね」

「別にいいけど・・・」

「・・・あゝそういえば今日部活の歓迎会みたいのがあったよな？」

「うん」

「昨日たしか言ってたよな、どこにするか迷ってるって」

「・・・うん」

「歓迎会見に行ったらどうだ？ いいところが見つかるかもしれないぞ？」

「・・・」

「・・・梓？」

「・・・お兄ちゃんがそう言っただったら見に行く」

「・・・そっか」

そして俺も今日の歓迎会を見に行くことにした。

俺が妹に恋をするかもしれない？（後書き）

感想、ご意見等がありましたらお願いします。

俺が妹に恋をするかもしれない？

放課後になり歓迎会に向かおうとしていると、

「中野今日の予定空いてるか？」

クラスで比較的仲の良い友人国崎が声をかけてきた。

「悪いけど俺は今日大事な予定があるんだよ」

俺は国崎の誘いを断り歩き出そうとすると、

「いや、今日は大丈夫だつて」

国崎が俺の肩に手を置き俺の行動をとめる。

「何が大丈夫か知らないが、今日は本当にダメなんだよ・・・妹と一緒に新人生の歓迎会に見に行かないといけないんだよ」

俺が説明すると国崎は「妹絡みか」と呟いて納得してくれた。

「んでお前の妹は何の部活に入るんだよ？」

「多分ジャズ研か軽音学だと思うけど・・・あ、お前どっちかの部活に知り合いつている？」

俺が質問してみると、

「俺は直接はいないけど・・・確かお前の中学の田井中って奴が部長だった筈だぞ」

（・・・田井中？ そんな奴いたろうか俺の中学の知り合いに）

「知らねーな、んじゃ俺は行かせてもらうからな」

「ああ、じゃあなシスコン」

国崎は俺に嫌みで言ったのかどうか真意は分からないが・・・俺にとっては最高の誉め言葉である。

歓迎会に向かっている最中に梓から連絡がきた。

「お兄ちゃん、クラスの子も一緒にいるけどいい？」  
とメールがきたので返信をする。

「大丈夫」と一言だけ返す。

目的地の場所まで着くと梓ともう一人の女の子が待っていた。

「お兄ちゃん、遅いよ」

「悪い、ちよつと色々あつてさ」

俺は遅れた言い訳をするが特に色々あつたのではないが言葉遊びみたいなものだ。

「それでそつちの娘は？」

俺が訪ねると、

「えつと、同じクラスの平沢さん」

と梓が紹介してくれる。

「初めまして、平沢憂です」

と平沢さんが礼儀正しい挨拶をしてくれた。

ここは梓の兄としてしっかり答えねば。

「俺は2年の中野柳、宜しくな」

俺がそういうと平沢さんは「はい」と笑顔で答えてくれた。  
(初対面で感じる印象は真面目で優しそうなイメージだな)

「君もどこかの部活に入るの？」

「いえ、私は一つ上の姉が軽音部にいるんでそれを見にきたんです」  
なるほど。

「お兄ちゃんもう軽音部の演奏始まつてるよ」

梓が俺を急かすように言い、そのまま歓迎会への入り口を開き中へ入る。

俺も続くように入ると演奏は一旦終了しててステージ上にの真ん中

にいる娘が喋り始めていた。

「おねえちゃんボーカルなんだ」

平沢さんがお姉さんを見て驚いてるようだ。

あの真ん中にいる娘が平沢さんの姉って事は俺と同じ中学出身の田井中だったけ、誰だろう？

俺はステージの上に立っている女の子四人を見比べるが誰も見た覚えがなかった。

そんなことをやっていると平沢さん（姉）が喋り終え演奏が始まった。

何でも題名は私の恋はホッチキスだそうだ。  
ずいぶん大胆な題名をつけるな。

曲は中盤になり梓の方を見るとあの顔をしていた。家族の俺しか分からないであろう、あの顔。

昔からそうだった梓は何か感動した時や、特別な何かを感じた時いつも……

眼を驚かせ、口を閉じ、胸の前で手を握りしめ、心を感動させる。  
昔からの梓の癖。

俺は梓の兄だから分かる、梓の心はもう決まったのだ。

この瞬間に……だって兄弟ってのは趣味や考えが似ているとよく言うがまさにその言葉が今は一番あうだろう……そう俺も今この演奏に感動したのだから。

翌日梓は軽音楽部に入部した。

俺が妹に恋をするかもしれない？（後書き）

感想、ご意見があれば気軽にどうぞ。

俺が妹に嫌われるかもしれない

「あの・・・楽器は何が好きですか？」

「ギターとか・・・」

「・・・そうなんだ」

「「・・・」」

再び長い沈黙

俺は「中野柳」

いま俺は訳あって音楽室にいるのだが・・・正直来なければ良かったと思っている。

過去にメールを送ることができのなら俺は迷わずこう送るだろう。

「音楽室      放課後      一時間後      行くべし」

目の前には先程から微妙に俺に話をかけ、長目に沈黙というワルツを奏でているのが、「秋山澪」さんである。

人見知りなのか、会話のキャッチボールが苦手なのか分からないが困ったものである。

この重苦しい空気は・・・

正直俺はこういうタイプの人嫌いではない、嫌いではないが苦手である。

まあ俺も女の子と喋ると言えば世界一可愛いであろう妹と母さんぐらいなもんで他人と喋るのは馴れていない。  
喋り続けていけばいずれボロがでてくるであろう。

まあなんにせよ、ここまでの経緯を話すには昨日の夜に話を戻さなければならぬ。

晩御飯を食い終え部屋で読みかけの本を取ろうとした時に最愛の妹が俺に相談を持ち掛けてきたのである。

「なるほどね、つまり梓は軽音部に入部したのは良いが殆ど練習もしないし茶ーばっかし飲んでる先輩達に呆れてるっていうことだな」  
俺は梓に相談された内容を復唱した。

「呆れてるわけじゃないけど・・・」  
梓は弁明するように慌てて言う。

「分かってるよ、梓はあんな演奏をした先輩達と自分も一緒に演奏をしたい、だから真面目に練習してほしい・・・そう思ってるんだろ」

俺がそう言つと梓は驚いた顔をした。

「どうしてわかったの？」

「そりゃ分かるさ、妹のことならなんでも知ってるさ、兄だから」  
俺が言つと梓は今度嫌な感じの顔をした。

「どうした？」

気になって聞くべきじゃなかった。

「なんかお兄ちゃんの最近そーいうの・・・  
嫌・・・」

鼓膜が破けるかと思った。

最愛の妹は俺に死の呪文を唱えたのだろうか？

「・・・えつと梓・・・なんで？」

俺は全身を震わせながら先程聞いた言葉の真意を確かめてみる。

梓はモジモジしながらこー答えた。

「・・・嫌って言う訳じゃないけど・・・気持ち悪い感じがして嫌・・・」

うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

心のガラスはもうヒビが割れて粉々である。

た、確かに最近はずも思春期で俺に対して素っ気ない態度やカリカリした態度をとることが多々見受けられる。

しかし、兄としてみればそこもまた梓の可愛い所であるが今回は胸に響いた。

今回の事を糧にして今後は無いように気を付けよう。

今後また同じことをして梓に嫌われたりするのは絶対に避けなければならぬ。

「う、ごめん！今度から言葉には気を付けるよ・・・なっ」

兄が妹に頭を下げたりするのは情けない風に見えるかもしれないが、一向に俺は構わない。

今回の相談もそうだが俺は梓のためにできることなら何でもしてやりたいと思っている、そう昔から俺は梓の役に立てるだけで幸せなのだから。

「・・・うん」

一段落し俺は梓に、

「とりあえず梓、部活の事は俺にまかせろ  
そう告げた。

「で、でも任せるってどうするの？」

そう聞かれた俺は一つ作戦があるのだが明日の梓の予定+この作戦を梓に言ったらを考えるとこう答えた。

「いいから、ちょっと時間をくれないか？ えっと明後日までだけ  
ど、いいな？」

俺は梓に心配をされないように立ち振る舞う

「本当に大丈夫？」

「ああ、任せておけて」

それだけ聞くと梓は納得をしてくれたのかどうか分からないが部屋を後にした。

さて、そうは言ったけどどうするか悩む所だ・・・仕方ない直球勝

負といくか。

と言うことで翌日の放課後俺は入部希望者として音楽室の前に立っているのだが・・・どうしたものか・・・

音楽室は空いてなく部屋の中に人の気配はない。

そもそも今日は部活休みなのかと考えていると・・・

「あの・・・なにか用ですか？」

後ろから声をかけられたので振り向くとそこにはそこには女の子が立っていた。

かなりの美人がそこにたっていた。

なんて例えるべきか俺のパツと身は「古き良き女性」っていう感じだけ。髪も真っ黒で腰にまで届く髪はこの子をより一層美しく写していた。

その時の俺に少なからず言えることは妹の事を数秒忘れ、

彼女に見惚れる

と言う事だろう。



俺が妹に嫌われるかもしれない(後書き)

次回もなるべく早く更新できればいいと思っています。

俺が妹に嫌われるかもしれない？（前書き）

すこーし間が空いてしまいましたけどどうぞ。

俺が妹に嫌われるかもしれない？

入部希望だと言うとその子は俺を音楽室の中に導いてくれた。

「もう少しでりつ．．．じゃなくて部長が来るから待っててもらえるか？」

「ああ、構わないよ」

言われながら勧められたイスに座る。

それにしても梓から聞いてイメージしていたのと随分違う気がするよ。

俺が頭の中ではもう少し．．．なんて言うんだろうか、ぶっ飛んだ感じの女の子達だと思っていた。

まあ、イメージと現実には常に表裏一体ではないからな．．．

「あの．．．」

斜めの席に座っていた軽音部の子が話かけてきていた。

「なに？」

「．．．名前は？」

ああ．．．確かに名乗ってはいないな．．．なんて言えばいいのやら．．．まあ嘘をついても直ぐにバレるだろうしな。

「2年3組の中野柳」

「中野君．．．あれ確か．．．」ああ、この前入部した中野梓の兄だよ

「そ、そうなんだ．．．私は秋山澪」

「・・・・・・・・」

なにこの沈黙・・・

なんか物凄く恥ずかしいんだけど。

ごく一般の思考の持ち主なら俺の事をどう思うのだろう、やはり気持ち悪いとお思いになるのであろうか？　どうなのだろう。

そんな醜態を晒してしまった俺の顔を盗み見るようにチラチラ見てくる秋山さんがいた。

「俺に何か？」

俺がそう聞くと秋山さんは顔を真っ赤にして驚きアーデモナイ、コーデモナイと何か喋っているが、次第に秋山さんは落ち着いてきて俺に話かけてきていた。

「・・・あの兄妹なのにあまり似てないかと、思っ

なるほど、いきなり失礼な事を言われた。

それで俺の顔を見ていたのか、まあなんだこの手の質問はよく有ることだった。

そもそも男と女の兄妹は顔が似ているなんて事があるのだろうか？  
もしも俺が梓に似ていたら、いや違うか梓が俺に似るのか順番的には・・・まあいい、梓に俺が似ていたらだが俺は世界で一番可愛い兄になってしまうであろう。

そんな事になってしまったら考えるだけでもおぞましいが、それこそガチガチの話になっていただろう。

色々考えた結果俺が返した言葉は、

「よく言われるよ」

と少し冷たさを織り混ぜて返した。

「そ、そうなんだ」

そんな会話を続ける気がない俺の回答に秋山さんはそう答えた。

俺は基本的には女の子が苦手である。どうしてもこうなんだ妹と比較をしまい、どうしても好きになれない。

そもそも妹と比較する時点で俺のシスコン度メーターは針を振りきっているであろう。

その後は対した話もなく数分が過ぎたところで音楽室の扉が開き三人の女の子が現れた。

まず第一声を上げたのが頭にカチューシャを着けていて、いかにも私は元気ですと言う感じの女の子が、

「おいーっす、澪・・・あれ」

次なる二番手は、

「澪ちゃん、おまたせ」

と秋山さんに声をかけたのは第一印象をあげるとポワポワした感じの女の子・・・だろうか。

最後に入ってきたのはいかにもお嬢様って感じの子・・・まあ感じただけで実際はどうか分からないけど・・・

（なんか俺がイメージしていたのとは違うな）

俺がそんな事を考えていると、

「澪この人は？」

カチューシャの子が俺を見ながら秋山さんに質問をする。

「ああ、入部希望者なんだけど・・・」

秋山さんがそう言つと、

「「「えええー！！！！」」」

三人共ド派手なりアクションを見せてくれた。

「それじゃ、中野君は軽音部に入部って言うことでいいんだよね？」  
一通り自己紹介を終えたところで田井中が質問してくる、

「ああ、そうだな・・・そういう事でいいよ」  
俺が曖昧に答える。

「それじゃ！新入部員の歓迎会をやらなくちゃな！」  
田井中が大声で皆に号令をかけると、

「そうですね」

琴吹さんが菜にか用意をし始める。

「中野君があずにゃんのお兄ちゃんだったんだね」

平沢が俺の入部を喜んでくれているらしく俺に聞いてくる。

しかし・・・あずにゃん？ あずにゃんか・・・なんて梓にピツタ  
りなあだ名だろう。あだ名のつけ親に感謝痛み入ります。

「ああ、そうだけど何か？」

聞き返す俺に平沢は、

「うっん、なんでもないよ」

なんだそりや・・・

「中野くんさあ、どこか前に会ったことある？ずっと前に？」

俺と平沢の話に割って田井中が聞いてきた。

「・・・いゝや」

全く身に覚えがないのでそう答えると、

「そうかな〜どこかで会った様な気がするんだけど・・・覚えてない？」

秋山さんに話を振るが、

「・・・分からないけど」

と返ってくる。

田井中は少し考えた後、思い出したように俺に話をふってきた。

「中野くんは楽器はなにやってたの？」

「俺は特に何もやってないんだ、不味かったかな？」

そう答える俺に、

「大丈夫だよ中野くん、アタシも入ったときはカスタネットぐらいしかできなかったけど、今はギター弾けるもん」

なぜか平沢が俺を弁護するように答えてくれた。

「そ、そうか」

「それじゃ何かやりたい楽器でもあるの？」

田井中に質問攻めにあう俺。

さて、なんて答えるか・・・いやここで答えるのは差ほど重要でもないし適当に答えるか。

「うーん、ベースかな」

答える俺に、

「ベース!？」

秋山さんがビックリした声とはこういうのだという見本の声を發した。

「どうしたんだよ遷」

そんな秋山さんに同じく驚いたであろう田井中が聞くと、

「なんでもない」

秋山さんが言う。

さて問題なくここまでいったが問題はその後だろう。

どうやって質問すべきか悩む所だ。

俺がそんな思考にフケていると琴吹さんがティーセットなるものを持ってきた、歓迎会、いやお茶会が始まった。

俺が妹に嫌われるかもしれない？（後書き）

次回は早めに更新できればいいと思っています。  
感想等があればお願いします。

俺が妹に嫌われるかもしれない？（前書き）

少しグダグダですがどうぞ。

俺が妹に嫌われるかもしれない？

時刻は五時を過ぎ春の独特な匂いを感じる放課後の帰り道。

大抵は一人で帰路につくのだが・・・今日の俺は一味違った。

高校生活を限りなく楽しんでいるのではないかと思わせる下校風景。

俺の隣には女の子が四人も並んで一緒に帰っているのだ。

正直俺の今までの人生の中で有頂天にはいるであろうシーンだ。

あの後紅茶とケーキを頂き微妙な満腹感に満たされて、この次は練習かと思っただがやはり聞いてた通り、ただ喋っているだけだった（顧問の先生も来ないし）。

まあこんな事が毎日続けば大丈夫なのかこの部活と思ってても仕方ないかもしれない。

実際楽で俺向きの部活ではあったのだが、いかんせ内のプリンセスは真面目なところありで・・・いやそこも梓の可愛さをだすポイントの一つなんだけど・・・さてどうしたものかと考えていると。

「中野くん、どうしたの？」

平沢が考え込んでいる俺の顔を覗き混むように見ながらこちらに声をかけてくる。

「いや、その、えーと・・・そうだ平沢はいつからギター始めたんだ？」

急に声をかけられ上手く返すこともできない俺は本当に適当いや、かなーりアバウトな質問を返す。

なんせ聞いた俺自身もあまり興味がないのだから。

「えーと、私は高校入ってからかな」

「ふーん、そうなんだ」

流すように聞いたが内心は驚いていた。

新入生歓迎会の時に聞いた時に俺は軽音部の曲に感動を覚えたのだ。音楽に疎い俺がああ曲を聞いて感動した。

そしてコイツは一年間で人に感動させることができる才能をもっている・・・正直会って一日と経っていないが平沢を凄い女の子なんだと思った。

「そういえばベースは持ってるの？」

と田井中。

「持っていないな・・・あーでも親父が持ってるかも」と俺。

「じゃあ無かったらどうするんだ？」

秋山さんが心配するように聞いてきた。

「まっ、無きや無いでどうにかするさ」

「・・・だったらさまた皆でバイトしない？」

俺が答えると直ぐに田井中がとんでも案をだす。

「いやそれは悪」そうだよ、りっちゃんナイスアイデアだよ!」

おいおい俺の話を聞けよ、平沢。

「そうね、唯ちゃんの時もそうだったし、私また皆でバイトをしたいし」

琴吹さんも乗り気だった。

「・・・梓はどうするんだ？」

少し重たい感じで秋山さんが皆に言う。

「大丈夫だよ澪ちゃん。あずにゃんも絶対一緒にバイトしてくれるよ」

何を根拠に平沢が言ってるのかは分からないが、俺は梓は手伝わな

いんじゃない思う。

長年の勘ってやつだけ。

そもそも多分梓は俺が軽音部に入ること嫌だと思う。

俺もそれが分かってやっているのだが。

「それじゃあ、明日は中野くんの楽器を買ったためになんのバイトをするか会議だー!!」

田井中が手を挙げながら号令をかける。

「おおー!!」

平沢と琴吹さんは同意するように手をあげる。

まずい。

俺が思い描いたシナリオとは全然違う感じになってしまった。

その後抗議するのもめんどくさくなり帰路に着く。

俺と平沢は帰りが同じ方角らしく今は二人で歩いている。

「ギター重たくないのか？」

「うーん、初めは肩とか痛くなったけど、もうなんともないよ」

「・・・軽音部楽しそうだな」

「えーなに言ってるの、あずにゃんと中野くんも入ったんだからもっと楽しくなるよ」

「・・・そっか、そうだよな」

俺は平沢の前向きで明るい性格が眩しくみえた。

家に着き梓は既に帰ってきていた。

今日の話を梓にすると俺が思っていた通りの言葉が帰ってきた。

「俺は妹に嫌われたかもしれない」と思う一言だった。

「・・・なんで今更なお兄ちゃん？」

俺にとっては重い言葉だった。

俺が妹に嫌われるかもしれない？（後書き）

感想、ご意見お待ちしてます。

次回も早めに書きたいと思います。

僕たちは指を絡め歩き出した

前編（前書き）

今回は過去の話です。  
グダグダですがどうぞ。

もしもあの時こうしてれば良かったなんてのは後になっても分かる事じゃない。

現にあの時の俺の行動は間違っていたのだろうか？

いやそもそも正解なんてあるのか難しいところである。

話は俺が小学校四年生まで遡らなければならない。

俺はその頃野球が大好きだった。

いや、野球も大好きだったのである。

だけどそれ以上に母さんの弾くギターが好きだった。

ある時俺は思った自分もこんな風に引いてみたいと・・・思った俺はそれを実行に移すことにした。

母さんに頼みギターを教えてもらいたいと言うと、母さんは物凄く喜んでくれた。

母さんは直ぐにでも教えたいと言ってくれた。

驚くことにその時親父は反対をしなかった。

今になって思うなぜ親父は反対をしなかったのだろうか？

まあ、あの親父だ。

聞いても答えてはくれないだろう。

その時に母さんに買ってもらったギターは今ももう物置の中に眠ったままだ。

買って貰った当時なんて宝物を扱うように大事にしていたのに……いや、今でもきつと大事な物なんだろう。

練習を初めて半年……正直あまり俺は音楽に対する才能は皆無に近かっただろう。

母さんから同じことを何回も教えてもらうが全く身に付かなかった。今思うと本当にセンスゼロだった。

学年が代わる頃妹の梓もギターに興味を持ち始め一緒に練習するようになった。

始めの内は俺が教えていたのだが、梓は俺が1覚えるの間に10覚える勢いでグングン飲み込んでいった。

一ヶ月経って梓が「お兄ちゃん見てて」と俺の前でギターを弾き、俺を超えたのだと分かるのに時間は入らなかった。

それから是一切ギターに触れることはなかった。

母さんはなにも言わなかったが、梓は俺が辞めたことを分からず聞いてきた。

「お兄ちゃん、ギターやらないの？」

梓は俺に俺のギターを持ちながら聞いてきた。

梓は兄の俺があんなに大事にしていたのギターをやらなくなって心配になって聞いてきたのだろう。

だけどその時の俺には逆効果だった。

幼かった俺はただ一言こういった。

「うるせーな、知らねーよ！」

それだけ言い俺はそのまま家を出て友達の家に行っていった。

今でも覚えている、俺が言った直後の梓の顔を。  
泣きそうな顔で俺を視る瞳を。

それから二年間ぐらいだろうか妹と話すことがめっきり減ったのは。

しかし中学に入る前の制服のサイズを合わせ  
試着している時に梓が制服を来ている俺に、

「お兄ちゃん、これ」

と目の前に差し出されたのは少し小さめのラッピングがされている  
箱だった。

中を開けるとチョコが入っていた。

そう、その日は二月十四日バレンタインだった。

チョコの形は少しと言うかなり歪だった。

そのチョコを見て驚いてる俺に、

「柳、梓が昨日一生懸命に作ったチョコよ」

母さんが俺に話しかけていた。

俺は感涙しそうになりながらチョコを食べた。

味は正直美味しいとは言えなかったがこう言った。

「ありがとう、梓」

それからだった。

俺が梓を世界一大事にしようと思い始めたのは。

しかしまあ、俺はある程度予想はできてはいたのだ。

梓がまた俺が楽器を始めれば俺を嫌う事を。

それはそうだろうな、一度小さい時とは言え妹の気持ちを踏みにじってきた物を再度やるなんて虫の良い話だ。

梓もだから俺に軽音部の話をするのは渋っていたし、話にくい話題ではあっただろう。

だけでもう前に進むしかないだろう。

それにこんな事でもう梓と仲が悪くなるなんてのはぜっーーーーー  
ーーーーーたいに嫌だ。

だから俺は前に進む。

僕たちは指を絡め歩き出した

前編（後書き）

後編は今日中にアップしたいと思っています。

僕たちは指を絡め歩き出した

中編（前書き）

えーと今回で今回の話を終わらせるつもりでしたが三回にわけました。

ではどうぞ

「遅いぞ、中野くん！」

待ち合わせの場所に遅れてきた俺を田井中は叱ってくるのだが、

「いや悪い・・・悪いけど本当にいいのか？」

俺は軽音部の集まってもらっているメンバーを見ながら再度確認の意味を込めて聞いた。

「なに言ってるんだよ、これも軽音部の活動だよ、活動」

田井中はややテンション高めに答えてくれた。

「それに楽器がないと何もできないしな」

秋山さんも同意するように答えてはくれるが俺は心配でしかたなかった。

そう俺の世界一可愛い妹梓の事で頭の中が一杯である。

断面図でも見ようなら「梓」「妹」としか写っていないだろう。

その梓は今回のバイトには参加してくれているが実際の所はどうなのだろう？

忘れてはいないが俺は梓に相談をされ今現在ここにいるのだ。

真面目に練習するなど昨日もなかったが。

「それじゃ二人づつに分かれよーぜ」

部長である田井中が皆に指示をだす。

「それじゃ、あずにゃん一緒にやろうっ」

と誘う平沢に、

「は、はい」  
と答える梓。

今回のバイトは交通量調査なのだが、前に一度平沢が軽音部に入った時にやっていたらしい。

俺としてはこの以外と簡単なバイトで助かって入るのだが・・・

「俺たちはどうする？」

田井中に聞くと、

「じゃんけんで決めるか」

と答え琴吹さんと秋山さんに集合をかけた結果。

「それじゃ、ムギ行こうぜ」

「はい」

と言いながら去っていく二人。

隣を見ると秋山さんは少し困った感じの顔をしている。

正直ここまで露骨に顔に出されると少し傷つくが・・・まだほんの二、三日だが秋山さんの性格が分かってきた。

まず基本は恥ずかしがり屋なのだが、特に男には滅法免疫がないときた感じなのだが・・・まあ今回のバイトは椅子に座って数を数えるだけでいいんだから俺も深く考えることもない。

「んじゃ、秋山さん行こうぜ」

俺はコップにも波風が立たないぐらいの自然な感じで聞いた。

「う、うん・・・きゃっ!!」

後ろを向くと秋山さんが足を絡ませたのか分からないが転んでいた。  
「大丈夫か？」

「う、うん」

転んだ秋山さんに手を伸ばす俺。

「え・・・あ、ありがとう」

差し出した手を掴まえてくれるまでえらい時間がかかった。

ただお互いに手を繋いだときに目があってきずいた・・・彼女は梓に似ている。

性格ではなく容姿が似ているのだ、もしも梓が何年か経てば彼女の様になる気がする。

多分始め会った時からだろうか妹以外の女の子を可愛いと思ったのは。

まあ確かに学校から家に帰れば天使が待っているような家に住んでいるのだから仕方のないことだったのかもしれない。

「・・・それじゃあ行こうぜ」

俺は繋いでいた手を離し微妙に照れくさかったので先に歩を進めていた。

「うん・・・」

と秋山さんはそれだけ言う俺の後ろを着いてきていた。

今回のバイトの交通量調査は二組のペアに分かれて一時間ずつの交代らしいのだが、梓と平沢、琴吹さんと田井中の二組でやるらしく、余った俺と秋山さんは全く知らない女子大学生であろう人達と組むことになった。

「はい、それじゃお願いね」

係りの人からカウンターをもらいコレで量っていけばいいのだろう。

「あの〜どちらから始めます?」

女子大学生の見た目が派手な人が訪ねてきた。

「・・・俺たちから始めますよ、いいか?」

と秋山さんに聞くと「うん」とだけ返ってきた。

向こうも「よろしくね」とだけ言い了解を得た。

そうここまでは良かったのだが、俺と秋山さんが持ち場に向かおうとする時に後ろから「カップルかな?」と話す声が聞こえてきた。

俺は何も気にせずに椅子に座ったのだが、秋山さんは顔を赤くと言うよりも真っ赤かにしていた。

後ろからは今も俺たちについての話し声が聞こえてくる。

もう少しボリュームを下げてほしいもんだよ。

話し声が聞こえなくなり秋山さんの顔から大分赤みがなくなった代わりに、俺たちの会話も全くない状態である。

ここで気の聞いた言葉でも言えるようなら俺は彼女を既に作っている気がするよ。

まあ梓の事を考えれば今彼女を作るなど考えられないが・・・

そう改めて確認することもないが、俺にとって妹は一番なのだ。

そんな事を考えていると、

「悪かったな」

突然秋山さんが話をかけてきた。

「何が？」

何をいきなり謝っているのが分からなかった。

「・・・その・・・わ・・・たしが・・・」

「わるい、なんて言ってるか全く聞こえん」

秋山さんの声は流れてくる車、風の音で聞こえなかった。

「その私達が恋人同士に見えるって言われて中野くん怒ってるみたいだったから」

何を言ってるんだこの娘は？

「・・・い、いや別に怒ってなんかいいよ」

「え、だってさっきからずっと難しい顔で俯いてたから・・・さっきの話を聞いて怒ってるのになって・・・」

なるほど、なるほどね。

俺は少しこの娘を誤解していた。

いや、どう考えたらその思考になるのやら・・・だがしかし・・・いや、そういう風に考えるのは俺の自意識過剰だろうか。

だけど無償に笑えてきた、こんな娘がいたのだと分かり嬉しかったのか。

「くっ、くっつ、フッフ、ハハハハ！」

バイト中ということを忘れて、笑ってしまった。

「！な、なんで笑うんだ！」

「い、いやその可笑しくてさ秋山さんが・・・秋山さんあまり男友達っていなかったろ？」

俺が聞くと笑った俺が気に入らないのか不機嫌そうに、

「そうだけど・・・」

「いや、普通男だったら秋山さんみたいな可愛い娘と恋人だって間違われたら嬉しいよ」

「えっ・・・で、でも何か難しい顔してたじゃないか！」

ムキになって言葉を返してくる彼女は梓に匹敵する愛くるしさがあった。

「悪かったな、生まれつきこういう顔なんだよ」

「・・・じゃあ私は・・・」

「そうだな、勘違いだな」

言うと同時に秋山さんは先程と同じように顔を真っ赤かにしていた。

その後からは俺から積極的に話すようになった。

そっ、こうやって人は話したら解りあえたり、仲良くだってなれる。

それが兄弟ならもつと簡単な筈だ。

俺は秋山さんに感謝しつつ妹に話すことを考えていた。

僕たちは指を絡め歩き出した

中編（後書き）

感想、意見がありましたらドンドンお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5985x/>

---

俺の妹は世界で一番可愛い

2011年11月16日18時42分発行